

漱石『こころ』生と死の鎌倉

Junko Higasa

作品に「先生」がどこでどのように自死したかは書かれていない。けれどその場所は「鎌倉の海」だと考える。すべてはそこに始まり、そこで終わる。

先生が出会った「私」という青年は、「次世代の新しい人間」であると同時に「かつての苦い記憶を持つ過去の自分と同年代の人間」である。それは未来と過去が交差する現在である。鎌倉という現在が、過去と未来をつなぐ場所になる。

「私」という青年は、他人どころか自分をも信じられなくなって死んだも同然の心を持つ「先生」の精神に「生」の息吹を吹き込む。また同時に「先生の過去を知りたいがる」ことによって「先生」の肉体を「死」へ誘う。先生の「心」は再生によって脅かされ、肉体の消滅によって安寧を得る。過去の罪の発覚は鎌倉の内海に始まり、贖罪は鎌倉の外海に終わる。

先生は乃木大将が自死した9月13日から二、三日して、即ち9月15日か16日に死ぬことを決意し、それから遺書をしたためるために十日以上費やしているので、自死したのは9月25日以降、9月末頃ということになる。

ここで先生の遺書から引用する。

『私は妻を残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を^{きょうふ}与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間に、こっそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。』

ここには自死の決意を妻に悟られ、一緒に自刃することになった乃木夫妻の事情も絡むが、それはさて置き、物語そのものの事情だけを追うことにする。

先生は「二丁ほど沖へ出る」ほど、泳ぎが達者であるとはいえ、9月の荒海である。全力を振り絞って泳いださう。Kの死の際、御嬢さんであった妻に「血の色を見せない」よう配慮したのと同様に、自分の死もまたKの死と同様に「頓死」といわせ、オフィーリアの画のように「気が狂った」と思われて水に沈む。自分の過去の扉が開かれた「鎌倉の海」で、その扉が開かれた時と同様に、「眼鏡と着物」を浜に置いて。

このようにしてエピローグはプロローグに戻ってくる。先生の過去が再び現在に戻ってきたように。「私」の記憶は呼び覚まされる。眼鏡を拾うというデジャビュ。その交流の始まりの瞬間が、先生の死を認識する別れの瞬間に変わる。先生の過去の扉は開錠者と同じ手で施錠される。先生の遺書に『私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまっておいて下さい。』とあるように、先生が独り心の中にしまっておいた記憶を、「私」は独り自分の中に抱えて生きなければならない。先生にとって、死のうと思って生きてきた年月と、死ぬ一刹那とどちらが苦しかったらう。果たして「私」にとって、知ってしまった一刹那と、秘密を抱えて生きる年月とどちらが苦しいだらう。(2020.6.17)